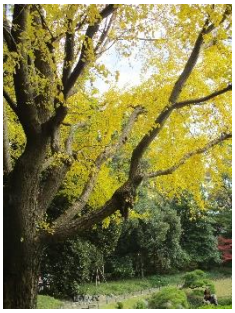
「日本庭園を語ろう」　～通訳案内士の視点で日本庭園を楽しむコツ～
2019 年　12 月 5 日（木）実施　JGA 第一支部

2019 年 12 月 5 日（木）「日本庭園を語ろう」研修が実施されました。参加者は 42 名（会員 33 名、非会員 7 名、委員 2 名）で関東地方のみならず北海道、大阪からも参加いただき熱心に講義に耳を傾けました。講師は JGA 正会員でもあり、ベテランガイドの池沢なるみ氏です。毎回大好評をいただいている研修で今回は清澄庭園にスポットをあてての講義となりました。

座学ではまず、日本庭園へのアプローチの方法から。単純ではないがどのような経過をたどり日本庭園がひとつの造形美として成り立っていったのかを写真（スライド）をみながら解説していただきました。飛鳥時代以前までさかのぼり、自然への信仰、古墳の築造、稲作など土木技術がベースにあったということ、奈良時代に入ると大陸からの影響を受けて庭園に曲水、複雑な形の池泉に島や平橋、反橋、石組みなどが現れ日本庭園の原型が整ってくる。末法思想の広がりと共に人々の祈りは浄土式庭園へと宗教色の濃い極楽浄土を模したものへと変貌をとげていくが、その後武士の世の中になると、より精神性の深い禅宗庭園へと発展していくこと。そしていよいよ平和な時代、江戸時代になるとこれらの様々な様式が総合的に取り入れられ、ついに集大成ともいえる「大名庭園」へと発展していく。これら一連の流れを池沢講師は絵巻物を語るように大変わかりやすく解説なさり、「庭園はなんとなく苦手だった」という参加者からも「大変わかりやすく面白い。ただ歩くだけじゃないんですね」との感想がありました。また、庭園様式からのアプローチ、その要素からのアプローチ、景物からの鑑賞法や作庭家の意図、なども解説。「日本庭園」のその奥深さを実感する講義となりました。座学を終えたあとは、さあいよいよ庭園探索です。ここまで内容の濃い講義を聞いて期待感も高まります。当日はこれ以上ないくらいの天候に恵まれてまさに「日本庭園日和」の 1 日でした。清澄庭園を何度か訪れたという参加者からも講義を聞く前にみた庭園と聞いた後の庭園は「風景や見る視点が全く違う」との感想がありました。清澄庭園の土地には、江戸の豪商「紀伊國屋文左衛門」（1669?～1734）の別邸があったといわれています。その後享保年間（1716～1735）には久世大和守の下屋敷となり庭園の元が形造られたものと考えられています。明治になると、三菱の創始者、岩崎弥太郎の所有地となり岩崎家三代に亘り庭園を完成しました。この土地に弥太郎は自社の船舶を使い四国、九州、中国、佐渡など日本各地から集めた奇石、珍石、名石を配し、その種類と数の豊富なことは近代庭園でも類を見ないものだそうです。講師が指摘する一つ一つに参加者は立ち止まり、鑑賞したり写真を撮ったり、実際に触れてみたりと、本当に一歩歩くごとにワクワクするような庭園探索でした。各地からの景石を見ながら、水辺の磯渡りや富士山に似せた築山の周りを歩いていると、まるで江戸時代の東海道を旅しているような気分になりました。しかもこの日の自然からのプレゼントは都内では大変珍しいカワセミに出会えたこと！参加者は思わぬ幸運に喜び、また、紅葉もピークを迎え、12 月なのにポカポカ陽気で風も吹かなかったため、池に映る逆さ富士ならぬ逆さ庭園も見ることができました。